

今までの、出エジプトの出来事、主の恵みの御業を確認しましょう。イスラエルの民はエジプトを脱出して紅海を渡りました。火の柱、雲の柱で荒野を導かれて進みました。マナ、水が与えられ、アマレクとの戦いに祈りによって勝利しました。これらの出来事のニュースはまたたく間に世界中に伝えられて行きました。そして、そのニュースはミディアンの地モーセのしゅうとイテロの所まで届きました。そのニュースを聞いた時、イテロの腰が上がりました。そしてイテロは、家族と共に、モーセに会いに行く決断をしました。

——— しゅうとイテロがやって来た ———

(1～12節) (2, 3A節) 「それでモーセのしゅうとイテロは、先に送り返されていたモーセの妻ツィポラと、彼女の二人の息子を連れて行った」のでした。モーセがイスラエルの民を引き連れて、シナイの荒野で宿営していたその場所に、モーセのしゅうとイテロは、モーセの妻と二人の息子を連れてやって来ました。モーセはびっくりしたでしょうね。家族がこんな荒野に突然やって来たのですから。モーセは喜んで義父を天幕に迎えました。彼は堰(せき)を切ったように主がイスラエルのために、ファラオとエジプト人にされたすべての恵みの御業を報告しました。その話を聞いてイテロは、モーセの神がイスラエルをエジプト人の手から救い出されたことで大いに喜びました。すべてうわさで聞いたとおりです。そして、彼は主をあがめ、モーセと共に礼拝を捧げました。これが1～12節での出来事です。

——— モーセ、家族をミディアンの地に返す ———

さて、以前モーセは神様から召しを受けて後、妻子と共にイスラエルの民を救う働きをするために、エジプトへと向かいました。(4:20節) 「モーセは妻や息子たちを連れ、彼らをろばに乗せて、エジプトの地へ・・・行った・・・」と書かれています。ところがその途中で、モーセは考えを変えて、彼らをミディアンのしゅうとの家に送り返してしまいました。そして改めて、今度は単身でエジプトへと向かいました。単身赴任です。なぜこんなことをしたのでしょう？

——— 家族と引き離されたモーセ ———

実は4:24～26節の所に、モーセの二人息子の割礼事件がありました。割礼というイスラエル独特の習慣に、妻ツィポラはなじめなかった様でした。妻の反対があつてかどうかわかりませんが、モーセは子供たちに割礼を施(ほどこ)していなかったようです。これからエジプトと戦って、出エジプトという大きな働きをしようとする時、神様との契約についての無理解が身内に在っては、足手まといとなるだけです。そのことを示されたモーセは家族と別れることにしました。身を切られるような思いだったでしょう。こうして彼は単身赴任の様な形でエジプトに向かうことになりました。でもこれで良かったと思います。それにしても、これから戦場に行こうとする時、家族を連れて行くでしょうか。おそらく行かないでしょうね。

——父と妻と息子との再会 ——

さて、18章に戻ります。長い間、会っていなかった、家族との劇的な再会です。(と言っても、それ程長い年月ではなかったようです。十の災害がなされた期間を一年と見ても、一年半以上にはならなかったと思われま)それにしても、この時の二人の息子との再会はさぞかしうれしかったことでしょう。

さて、モーセと妻チッポラとの間に与えられた、その二人の息子の名は、一人はゲルショムで「私は異国にいる寄留者だ」という意味でした。もう一人はエリエゼルです。「私の父の神は私の助けであり、ファラオの剣から私を救い出された」という意味でした。

この名前からしても、父親モーセが他国で苦勞していた時に、家族全員が父親の働きの為に、日夜祈っていた事がよくわかります。

さて、モーセはしゅうとイテロを喜んで迎えました。

(7節)「モーセはしゅうとを迎えに出て行き、身をかがめ、彼に口づけした。彼らは互いに安否を問い、天幕に入った。」

(8節)「モーセはしゅうとに、主がイスラエルのために、ファラオとエジプトになさったすべてのこと、道中で自分たちに降りかかったすべての困難、そして主が彼らを救い出された次第を語った。」今までに起こったいろいろな出来事を、なんとあの口の重いモーセが情熱と喜びをもって、一生懸命、イテロに伝えようとしています。きっとイテロはモーセの変わりように驚いたことでしょう。しかし、それ上に驚いたのはその語られた内容でした。

(9節)「イテロは、主がイスラエルのためにしてくださったすべての良いこと、とりわけ、エジプト人の手から救い出してくださったことを喜んだ。」今、イテロはモーセの口から語られる一つ一つのことばに驚きと喜びを持って聞き入っています。それにしても何と、感激と喜びに満ちた光景でしょう。親しい仲間同士、互いに出会って、信仰上の経験、恵みを分かち合う事は、実に素晴らしいことです。私たちの家庭の中でも経験したいですね。

(10、11節)「イテロは言った。『主がほめたたえられますように。主はあなたがたをエジプト人の手とファラオの手から救い出し、この民をエジプトの支配から救い出されました。今、私は、主があらゆる神々にまさって偉大であることを知りました。』この様にイテロは、モーセから圧倒的な恵みと勝利の報告を聞いて、モーセの神が他のどんな神々よりも素晴らしい神様であることを告白しました。

(12節)「モーセのしゅうとイテロは、神への全焼のささげ物といけにえを携えて来たので、

アロンとイスラエルのすべての長老たちは、モーセのしゅうとともに神の前で食事をしようとやって来た。」モーセたちは、イテロを同じ神を信ずる仲間として受け入れました。

イテロは今まではミディアンの地の偶像崇拝者であったと思われませんが、ここで神への全焼のいけにえを献げることをモーセたちが許していることは、イテロが、今はすでに真の神様を信じている者であり、真の祭司であることをみながすでに認めています。確かに、今モーセのしゅうとイテロは、真の神様を信ずる者とされているのです。それにしても

モーセはイスラエルを救い、家族をも救いに導きました。

モーセの献身は、更に家族の者をも献身に導いたのでした。

——— 問題を指摘して、モーセに助言を与えたイテロ ———

さて翌日のことです。モーセはいつもの様に、彼の仕事を始めていました。そんなモーセの姿をイテロは見つめていました。この時モーセは気づいていなかったのですが、実はイスラエルの民の中に内面的な、組織的な問題が起こっていたのです。その問題をしゅうとイテロによって、モーセは指摘されました。

(13節)「翌日、モーセは民をさばくために座に着いた。民は朝から夕方までモーセの周りに立っていた。」

(14～16節) イテロはそれを見て、モーセに向かって助言をしました。

(17～19節)「あなたがしていることは良くありません。あなたも、あなたとともにいるこの民も、きっと疲れ果ててしまいます。このことは、あなたにとって荷が重すぎるからです。あなたはそれを一人ではできません。さあ、私の言うことを聞きなさい。あなたに助言しましょう。どうか神があなたとともにいてくださいますように。あなたは神の前で民の代わりとなり、様々な事件をあなたが神のところに持って行くようにしなさい。」

(20～26節) イテロはさらに「民の中から有能な人で神を恐れ、誠実で、不義の利を憎む人を選び、それを民の上に立てて、千人の長、百人の長、五十人の長、十人の長としなさい」と進言しました。モーセはイテロの言葉に従い、すべて言われたようにしました。

このようにして、大きい事件はモーセが、小さい事件は彼らがさばくようになりました。

(証) 名古屋西教会でコンラード宣教師と家庭訪問をしていた時のことでした。その時先生はポツンと言われました。「アメリカではこの様な訪問は信徒がします。何かの問題があった時だけ、手に負えない時だけ牧師が訪問します。」

それにしてもモーセはイテロの勧めを素直に受け入れました。そして、主のご栄光をあらわしました。ここがモーセの偉大なところですね。民のために益となることなら何でも、誰の言葉でも素直に聞く、モーセの様な心の柔らかさが指導者には必要なのですね。

(27 節)「それからモーセはしゅうとを送り出した。しゅうとは自分の国へ帰って行った。」

それにしてもイテロは、素晴らしい人材の発見者でした。そして、彼は仕事が終わると（使命を果たし尽くすと）あっという間に郷里に帰ってしまいました。

彼が帰った後、そこには千人の長、百人の長、五十人の長、十人の長が残されました。

もうモーセは一人ではありません。教会もこの様でなくてはなりません。

あの信仰の父アブラハムには、年長者のしもべがいました。

ナアマン將軍には、名もなき賢い家来がいました。そして、

牧師の周りにも、執事、しもべがいるのです。

——— 執事の起こり ———

ひとりで何もかもすることはできません。初代教会においても、数少ない使徒たちが何もかもしていた時、彼らは思わぬ失敗をしてしまいました。そのことが使徒の働きに書かれています。そのような時に、彼らに与えられたみことばです。

(使徒 6:3、4 節)「・・・あなたがたの中から、御霊と知恵に満ちた、評判の良い人たちを七人選びなさい。その人たちにこの務めを任せることにして、私たちは祈りと、みことばの奉仕に専念します。」これが、教会の執事の起こり、始まりです。

教会が大きくなった時、使徒たちは本来の働き、「祈りと、みことばの奉仕」が出来なくなりました。その時、教会は 7 人の執事を選びました。その結果、使徒たちは本来の一番大切な働き「祈りとみことばの奉仕に専念」することが出来る様になりました。これは、神様と直結する働きです。今の時代、神様と直結しない働きでお茶を濁している働き人がいたとしたら残念なことです。

- ・モーセにとって (19 節)「神の前で民の代わりとなる」ことが最も大切であった様に
- ・使徒たちにとっても (使徒 6:4)「みことばの奉仕に専念」する事はとても大切でした。
- ・私たちキリスト者にとっても、みことばの前に「静まる」ことは絶対に必要なのです。

あわただしい毎日、目まぐるしく動き回る事だけが目的であるかのように錯覚してしまう環境のなかで「静まる」時をもつことは、たやすくはありません。それを得るには戦いがあります。でも主は語っておられます。

「静まって、わたしこそ神であることを知れ。」詩篇 46:10 節 (口語訳)

無力になって (静まって)、神様を見上げる時、神様と出会い、みことばを知ることができます。

そして、何をしたら良いのかがわかります。神様から期待されている働きをしましょう。